



3 学年に向けて

先週の球技大会や今週の特別時間割の合間をぬって我々教員が何をやっているのかというと、一年間の成績の推移を見ながら、最終的な5段階評定を出しているわけである。5段階とはいっても、「1」は未修得を表すことになるので、ほとんど場合「1」はつかない。だから、「2」～「5」の4段階しかないわけだが、前期中間考査から後期期末考査までの素点の得点推移状況や、単語テストの合計点などを見返しながら、我々はそれなりに悩み悩み評定を決定することになる。

例えば古文の単語小テストに関して言うと、古文を不得意にしている人にとっては、単語力はやはり基礎力として重要だから身につける意味が十分にあるし、単語を覚えるということは分かりやすく実行しやすい勉強だから、たとえ定期考査で思わしくない結果しか残せなかったとしても、単語テストで得点を重ねていけば、合計して何とか合格点にしてやろうという意図もあるわけで、そのことは授業の最初に十分に説明したはずである。ところが、もう予想がつくと思うが、定期考査で高得点をとる人は、この単語テストでもコツコツと点数を積み上げるのに対して、定期考査でヤバイ人は、この単語テストでも得点を積み上げることができておらず、結果として上位者と下位者の差が広がってしまう傾向にあるのである。

＊

3年生になると理社の勉強がより一層重要になる。例えば東大なら、文系の人は社会2科目、理系の人は理科2科目を二次試験でも選択しなければならず、しかも、2科目とも高得点を目指さないと合格は難しい（東大二

次でなくても、センターでは当然必要になるわけだから、どちらにしろ2科目の完成を目指すことが求められる）。この2科目というのがくせ者で、1科目なら何とか間に合うのだが、2科目目ともとなると…という状況になる人は結構多い。ここはそのことを覚悟してしっかり準備をしてもらうほかないわけだが（例えば、土曜講習も3年生になると理社が中心になる）、一方で国数英の力も当然伸ばしていかなければならない。

となると、大切なことは授業を活用することである。ご存じの通り、日比谷のセンターの結果は、国数英とも全国平均を大きく上回る結果を残している。つまり、目の前の授業を確実にこなしていけば、自ずと結果はついてくるのである。それ故、文系の人は必修＋必修選択で8時間となる英語と7時間となる国語を、そして、理系の人は同じく必修選択7時間（さらにほとんどの人が自選2時間も選択している）となる数学の授業を、どれだけ大切にして生かしていけるのかということが、現役合格に大きく響いてくるのである。

＊

どこかに自分に向けたいい授業があるのでないかと思っている人は、永遠にそのような授業には出会えないだろう。色々な参考書があるが、大切なことは「いい参考書を選ぶこと」ではなく「選んだ参考書を徹底的に活用すること」であるはずだ。授業も同じである。目の前に与えられた課題を継続して着実にこなしていくこと、これが現役生の勉強のコツである。そのことをしっかり認識し、授業を大切にしているか、振り返ってほしい。